

第一章…聖域を脱ぎ捨てて、湯けむりの向こう側へ
しんしんと冷える山あいの空気。キヴォトスの喧騒を遠く離れ、たどり着いたのは古びた、
けれど手入れの行き届いた高級老舗旅館だった。

「わあ……、ここが先生の仰っていた温泉宿、ですか。とても趣があつて、心が洗われるよ
うです」

隣で控えめに、けれど嬉しそうに声を弾ませたのはマリーだ。トリニティのシスターフッド
に所属し、誰からも女神のように慕われる彼女。そんな彼女とこうして二人きりで旅行に
来ているという事実には、俺の心臓はさつきからずつとうるさいくらいの鼓動を刻んでいる。

「少し急な誘いだつたけど、マリーは最近頑張りすぎだつたからね。たまにはこうして羽を
伸ばすの必要だよ」

「先生……。ふふっ、ありがとうございます。心から祈ります。この休息が、先生にとって
も良きものとなりますように」



マリーはいつもの穏やかな笑みを浮かべ、胸の前でそっと手を合わせた。ヴェールの下からのぞく瞳は澄んでいて、そのあまりの純真さに、邪な考えを持つていた自分を恥じたくなる。……いや、でも、これから起きることを想像すれば、平常心でいられるはずがない。仲居さんに案内されて部屋に入ると、畳の香りがふわりと鼻をくすぐった。広々とした和室の奥には、専用の露天風呂が見える。

「……あの、先生。お部屋、一つなんですけどね？」

マリーが頬を微かに赤らめながら、おずおずと尋ねてきた。

「ああ、ここは離れだからね。人目も気にしなくていいし、マリーもゆつくりできると思っています」

「そ、そうですね。先生が選んでくださった場所ですもの。わ、私、なんだか緊張してしまっていて……あつ、ああつ、あわわっ！」



部屋の隅に置かれた生け花の台に少し躓き、マリイがよろける。俺は咄嗟にその細い腰を抱き寄せた。

「大丈夫？」

「は、はい……すみません、先生。私、やっぱりまだ未熟ですね。こんなところで慌ててしまうなんて、立派なシスターへの道はまだ遠そうですね……」

腕の中に収まったマリイの体は、驚くほど柔らかい。そして、厚手の修道服越しでもはつきりと分かる、その豊満な胸の弾力。キヴォトスの住人なら誰もが知る、彼女のその控えめな外見に反した圧倒的なまでの「育ちの良さ」が、ダイレクトに俺の腕に伝わってくる。

「……先生？」

上目遣いで俺を見つめるマリイ。至近距離で交わる視線。彼女の吐息が熱を帯びているのがわかる。俺は慌てて体を離れたが、手の平に残った柔らかな感触が、脳を痺れさせていた。



「とりあえず、夕食の前にひとつ風呂浴びてこようか。浴衣、着替えてみる？」
「はい、そうですね。せっかくだすから、郷に従ってお着替えしてみようと思います」

マリーは用意されていた浴衣を手にとると、少し戸惑ったように笑った。

「あの……先生。お着替え、少し手伝っていただけますか？ 帯の結び方が、よく分からなくて」

あまりにも無自覚な誘惑。いや、彼女に限ってそんなことはないはずだ。マリーはいつだって誠実で、優しく、俺のことを信頼しきっている。その純粋な信頼に応えなければならぬ。……そう自分に言い聞かせながら、俺は彼女の着替えを見守ることになった。

マリーが修道服のボタンを一つずつ外していく。ヴェールが脱がされ、その下から隠されていた愛らしいケモ耳がびよこんと顔を出した。普段は隠しているその耳が、今は少し不安げに震えている。



「あ……。そんなにじつと見られると、恥ずかしいです……。先生」

服が床に落ちるたび、露わになっていく白い肌。そして、最後に残った下着姿の彼女を見た瞬間、俺は息を呑んだ。

溢れんばかりの……。いや、実際にブラジャーのカップから零れ落ちそうなほどに巨大な双丘。シスターフッドの清楚なイメージからは想像もつかないほど、彼女の体は成熟し、官能的な曲線を描いていた。

「先生、どうして……。そんなに黙って……。もしかして、変でしょうか？」

「いや、全然。すごく……。綺麗だよ、マリー」

「っ……。！ あ、ありがとうございます……」

顔を真っ赤にしながら、マリーは急いで浴衣を羽織った。しかし、あまりにも胸が大きすぎるせいで、合わせ目がどうしても浮いてしまう。

「あ、あの、先生……。やっぱり、うまく合わなくて。き、きついです……。あつ、ああつ、

あわわっ！」

帯を締めようと四苦八苦するうちに、浴衣の裾が乱れ、マリーの太ももが露わになる。俺はたまらず、彼女の背後に回ってその帯を手を取った。

「手伝うよ」

「すみません、先生……。私、本当に手がかかる生徒で……」

背中越しに伝わるマリーの体温。帯を締める際、どうしても俺の手の甲が彼女の豊かな胸の膨らみに触れてしまう。

「ひゃっ!? あ、な、なんでもありません。先生の手、温かいですね……」

マリーの吐息が荒くなる。俺が帯をキユツと結ぶと、強調された胸の溪谷が浴衣の隙間から覗き見えた。清楚な浴衣姿のすなのに、そこにある圧倒的なポリウーム感のせいで、かえって卑猥なほどの色香を放っている。



「……できました。どうかかな？」

「ありがとうございます、先生。……あの、少し苦しいですけど、でも、先生に結んでもらえて、すごく嬉しいです」

マリーは鏡に映る自分を少し恥ずかしそうに見つめ、それから俺の方を振り返って、花がほころぶような笑みを見せた。

「先生。……一緒に行きましょう？ その、温泉。外は寒いですから、早く暖まりたいです」

その言葉には、ただの入浴以上の意味が含まれているように聞こえてしまったのは、俺の煩惱のせいだろうか。いや、マリーの瞳の奥にある熱は、確実に俺を求めている。

「……そうだね。行こうか」

俺たちは並んで、湯けむりが立ち込める浴室へと向かった。これから始まる、聖域を脱ぎ

捨てた夜の序章を感じながら。

第4章…湯けむりに溶ける聖域、柔らかな慈愛に抱かれて

しつとりと濡れた廊下を歩き、二人きりの露天風呂へと足を踏み入れる。

湯気で白く煙る空間に、微かな硫黄の香りと、マリーが纏う石鹼のような清純な香りが混ざり合っていた。

「……先生。あの、私……。混浴なんて、その……初めてで。いえ、もちろん先生となら、その、嫌だなんて……そんなことは、決してありませんけれど」

脱衣所で浴衣を脱ぎ捨て、タオル一枚を身に纏ったマリーが、震える足取りで洗い場に立つ。

湯気越しに見えるそのシルエットは、あまりにも暴力的だった。

細い腰つきに反して、胸元の膨らみが重力に抗うように、けれどゆったりとした重量感を持って存在を主張している。



「あ……。あ、あの……。あまり見ないてください……。恥ずかしくて、どうにかなくなってしま
いそうです。あつ、ああつ、あわわっ！」

濡れた床に足を取られ、マリリーの体が大きく泳ぐ。

咄嗟に駆け寄り、その柔らかな肩を抱き止めた。

手の中に収まる、吸い付くような肌の質感。

タオルの隙間から、はち切れんばかりの白い果実が零れそうになり、俺の視界を支配する。

「大丈夫だよ、マリリー。ゆっくり、俺に掴まって」

「すみません……。いつも先生に助けていただいていたばかりで……。ふふっ、でも……。先生の腕の中、すごく安心します」

マリリーは俺の胸に顔を埋めるようにして、小さく吐息を漏らした。

熱気を帯びた吐息が鎖骨のあたりにかかり、背筋がゾクゾクと震える。

彼女の頭にあるケモ耳が、羞恥と興奮で小刻みにビクビクと動いているのが分かった。

俺たちはゆっくりと、湯船へと沈んでいった。

熱いお湯が体を包み込むが、それ以上に、隣に座るマリリーの体温が熱く感じられる。

お湯の中で、彼女の巨大な双丘が浮力を受けてふわふわと揺れていた。

水面から覗く、白く透き通るような肌。

ヴェールを脱いだ彼女の髪はしっとり濡れ、うなじから肩にかけてのラインが、いつも
の清楚なシスターとは違う、一人の女性としての艶めかしさを放っている。

「先生……。お湯、気持ちいいですね。なんだか、心まで蕩けてしまっそうです……」

マリリーがそつと、俺の肩に頭を預けてきた。

お湯の中で、彼女の太ももが俺の足に触れる。

ヌルリとしたお湯の感触と、彼女の滑らかな肌の感触が混ざり合い、境界線が分からなくなっていく。

「マリリー……。少し、こっちを向いて」。

「はい……………？ あっ……………んっ」

名前を呼んで、彼女の顎を指先でクイと持ち上げる。

潤んだ瞳が俺を見つめ、熱い吐息が唇の間から漏れた。

ゆっくりと顔を近づけると、マリィは逃げることをなく、むしろ自分から吸い寄せられるように目を閉じた。

唇が重なる。

最初はお互いの熱を確かめるような、柔らかな触れ合い。

けれどすぐに、マリィの方から舌先で俺の唇をなぞるように求めてきた。

熱い、甘い、蜜のような味。

「はあっ……………ん、ふ……………っ……………先生、れ……………。……………っ、ちゅ、ぶはっ……………。あ、あの……………」

離れた唇の間から、銀色の糸が引く。



マリーの頬は林檎のように赤く染まり、その瞳は情欲と慈愛が混ざり合った、妖艶な光を宿していた。

「マリーのここ、すごく……綺麗だ」

俺の手は、自然とお湯の下で揺れる彼女の胸へと伸びていた。

指先がその柔らかな膨らみに触れた瞬間、マリーが「ひゃうんっ!？」と可愛らしい声を漏らして体を跳ねさせる。

「あ、あ……っ。先生の手……っ、熱いです。お湯よりも、ずっと……っ。ああ、んっ、ふああ……っ」

片手では到底収まりきらないほどのポリウム。

掌いっぱい肉を掴み、ゆっくりと指を沈めていく。

マシユマロよりも柔らかく、けれど芯には確かな女性としての熱を秘めた弾力。

揉みしだくたびに、指の間から溢れ出す肉の感触が、俺の理性を粉々に砕いていく。

「ん、んんう……っ！ あ、あつ……そこ、優しく……っ、ああ、でも、もつと……強くして、ください……っ。私、先生に……いじられて、おかしくなっちゃいそう……」

マリ―は自分の胸を揉む俺の手の上に、自分の小さな手を重ねてきた。より深く、より密着するように。

彼女の指が俺の手に絡み、恍惚とした表情で首をのけ反らせる。びんと立ったケモ耳が、彼女の感じている快樂の強さを物語っていた。

「マリ―、すごく……いい声だ。もつと、見せてほしい」

「あ……っ、はあ、はあつ……。先生、そんな……意地悪……。でも、先生が見たいと仰るなら……私……。あつ、ん、んああああつ！」

俺が親指の腹で、その先端にある硬い突起をコリコリと弄ると、マリ―は腰を浮かせて俺にしがみついていた。

豊かな胸が俺の胸板に押し潰され、熱い鼓動が直接伝わってくる。

「先生……先生……。私、あなたのことを……。つ、導かなきゃいけないのに……。今、私
が……。導かれてるみたいで……。あ、ふうっ……。ああっ！」

マリリーの吐息が耳元で弾ける。

彼女の情欲は、ここに来てさらに深みを増していた。

俺は彼女を抱きかかえるようにして、自分の膝の上に乗せた。

お湯から出た上半身に、夜の冷気が触れるはずなのに、二人の間にある熱量はそれを許さ
ない。

「先生……。あの……。さつきから、私……。胸が、張って……。なんだか、とても……。変な
感じがするんです。ここを、吸ってください……。赤ちゃんに、授けるみたい……。優し
く……。」

聖職者である彼女の口から出た、あまりにも背徳的で慈愛に満ちた誘い。
マリリーは自ら、その巨大な胸を持ち上げ、俺の口元へと差し出してきた。

白い肌に浮き上がる、淡い桜色の光景。

「……………いいよ。マリー」

俺は彼女の言葉に従い、その先端を唇で包み込んだ。

「あ、あああああ……！ん、んっ、はあああ……！せ、先生……っ、それ、すご……っ。あ、はあ……んうっ……」

口の中に広がる、甘美な温もりと弾力。

舌で転がし、軽く吸い上げると、マリーの体がビクンと大きく震えた。

彼女は俺の頭を、大きな胸で包み込むように抱きしめる。

「ふ、ふふっ……いいですよ。たくさん、飲んでください……。私の全部、先生に……。あ、ああっ……んう……っ、優しい……先生の口、あったかい……。あ、ああっ、あわわっ！そんなに……っ、そんなに強く吸われたら、私、本当に……シスターでいられなくなっ

ちやう……っ！」

マリীর慈愛は、次第に濃密な母性へと変容していく。

俺の頭を優しく撫で、耳を甘噛みし、熱い吐息を吹きかけながら、彼女は自分自身も快樂の泥濘に沈んでいった。

お湯の音、荒い呼吸、そして彼女の甘い喘ぎ声だけが、静かな温泉宿に響き渡る。

「はあ、はあ……っ……。先生……。私、もう……。我慢できません……。お部屋に、戻りましょう……。？ もっと、もっと……。先生のことを、感じたいんです……。私を……。あなたのものに、してください……。」

湯気の中で、マリীর瞳が情欲に濡れてキラキラと輝いている。

俺たちは濡れた体のまま、縛れるようにして脱衣所へと向かった。

これから始まる、ベッドルームでの「儀式」を求めて。



第○章…聖女の献身、白濁に染まる慈愛の夜

湯上がりで火照った体のまま、俺たちは部屋へと戻った。

冷房の効いた部屋のはずなのに、二人を包む空気はしっとり重く、肌が触れ合うたびに火花が散るような熱を感じる。

マリ―は乱れた浴衣を直すこともせず、布団の上に腰を下ろすと、潤んだ瞳で俺を見上げてきた。

「はあ……はあ……先生……。私、なんだか……胸の奥が、ずっと熱くて。温泉のせいだけじゃ、ないみたいです。あ、ああっ……んっ」

彼女が吐き出す息は、甘く、蕩けるような熱を帯びている。

ヴェールを脱ぎ捨て、露わになったその耳が、俺の視線を感じてびよこびよここと小刻みに震えた。

俺は彼女の隣に座り、その細い肩を抱き寄せた。

それだけで、マリ―の体はビクンと大きく反応し、そのまま俺の胸へと倒れ込んできた。



「……先生。私を、もっと……。シスターとしてではなく、一人の……女の子として、見ていただけますか？ 私、先生のためなら……どんなことでも、したいんです」

マリイは震える手で、俺のズボンのベルトに手をかけた。

羞恥心で顔を真っ赤に染めながらも、その腫には強い決意と、深い慈愛が宿っている。ゆっくと、けれど確かな足取りで、彼女は俺を解放していく。

「あ……。せ、先生……。こんなに、熱くなって……。私、驚いてしまいました。でも……不思議と、怖いとは思いません。これが……先生の、熱さなんですわ」

マリイの白く柔らかな指先が、俺の熱に触れる。

その瞬間、彼女は「あはっ……」と短く、けれど艶めかしい吐息を漏らした。小さな掌が俺の膨張した熱を包み込み、上下にゆっくと動かし始める。

「ん、んう……。っ……。先生、気持ちいいですか？ 私、本で読んだことがあるんです……。こうして、優しく包んであげると……。良いって。あ、ああっ、あわわっ！ そんなに……」

ビクビクしてして……っ。私の手、熱いですか？」

マリリーは自分の未熟さを恥じるように言いながらも、その手つきは驚くほど優しく、そして本能的に俺の弱点を突いてくる。

ヌチユ、という卑猥な水音が、静かな部屋に響き渡った。

彼女の指が、先走りの雫を絡め取りながら、亀頭の裏側を丹念に弄る。

「はあ、はあっ……。先生の顔……すごく、熱に浮かされているみたいで……。私、そんな先生を見ると……。自分まで、どうにかなっちゃいそう……。っ。ん、んんう……。っ、ちゅ、ぶ……。」

マリリーは突然、その場に膝をつき、俺の股間に顔を近づけた。

長い睫毛が震え、彼女の熱い吐息が直接俺の熱を撫でる。

そして、彼女は躊躇うことなく、その小さな口を開いて、俺の先端を優しく含んだ。

「んむ……。っ、れ、れ……。っ。……。ちゅ、ぶはっ……。ん、んんう……。」



口腔内の、驚くほど滑らかで熱い粘膜の感触。

マリーの舌が、俺の熱を愛おしむように、丁寧に、けれど大胆に絡みついてくる。彼女の喉がゴクリと鳴るたびに、強い吸引力が俺を襲い、腰が浮きそうになる。

「はあ……先生。……美味しい、です。先生の味がします……。んっ、じゅる……。れるっ……んっ、ふ……。っ」

マリーは上目遣いで俺の反応を伺いながら、さらに深く、喉の奥まで俺を迎え入れていく。時折、彼女の小さな牙が微かに触れるのが、かえって心地よい刺激となって脳を突き抜ける。

シスターとして誠実に、けれど淫靡に。

彼女の献身的なフェラチオに、俺の理性が削り取られていく。

「ん、んんうーっ！ んふ、はあっ……！ せ、先生……。っ、まだ、物足りませんか？ でしたら……。私の、これを使ってください……。」

マリ―は浴衣の帯を完全に解き、前を大きくはだけさせた。

そこから現れたのは、もはや暴力的なまでのポリュームを誇る、巨大な乳房。

お湯から上がったばかりの白い肌は、ピンク色に上気し、網目のような血管が微かに浮き出ている。

「私の……この、はしたない体……。先生を喜ばせるためにあるなら……。どうぞ、好きなか
け……。っ」

マリ―は俺の熱を、その巨大な双丘の間に挟み込んだ。

ムニユ、と肉の中に埋もれていく感触。

あまりの肉厚さに、俺の熱は根元まで完全に見えなくなった。

マリ―は自分の両手でその胸をグッと中央に寄せ、俺の熱を力強く、けれど優しく圧迫する。

「あ、あああああっ……。っ！　せ、先生……。っ、凄いです……。私、自分の胸が、こんなに熱

くなるなんて……初めて知りました……。っ。あ、ん、んああっ！ ヌルヌルして……。先生の熱いのが、私の胸を……。っ、はあ、はあっ……。っ！」

マリーが腰を振り、胸を上下に動かすたびに、大量の愛液と汗が混ざり合い、グチヨグチヨと卑猥な音を立てる。

彼女の豊かな肉に包み込まれ、俺の熱は限界まで高まっていく。

マリーの表情は、もはや聖女のそれではなく、愛を渴望する一人のメスの顔だった。

「はあ……はあ……っ！ 先生、私……っ、もつと……っ、もつと、強くして……！ 私の胸を、壊しちゃうくらい……。っ、押し付けて……。っ！ あ、ああっ……。んっ、ふああああっ！」

俺は彼女の腰を掴み、その巨大な胸の溪谷へと腰を叩きつけた。

マリーの胸が大きく波打ち、彼女の口からは言葉にならない、甘い悲鳴が溢れ出す。

ケモ耳が激しく揺れ、彼女の恍惚とした表情が俺の視界を埋め尽くした。

「あ、ああ……。っ、先生、先生……。っ！ 来る……。っ、私、出ちやいます……。っ、先生の

が……私の、中に……っ！ あ、ああっ、あわわっ！ ん、んんんうーっ！！」

限界を迎えた俺が、彼女の胸の間に熱い塊をぶちまける。

ドクンドクンと脈打った時に、マリーの白い肌が白濁した液体で汚されていく。けれど彼女は、それを嫌がるどころか、うっとりとした表情でその光景を見つめていた。

「はあ……、はあ……。綺麗……。先生の、大切なもの……。ふふっ、こんなにたくさん……」

マリーは指で自分の胸に飛び散った白濁を掬い取ると、それを慈しむように見つめ、そして迷わず口へと運んだ。

「ん、んう……。……んっ、ぶはっ……。……しょっぱくて、でも……。とても温かいです。先生の命が、今、私の中に……」

彼女は舌を出して、胸の間に溜まった白濁を丁寧に舐めとっていき、最後の一滴まで残さず、ゴクリと喉を鳴らして飲み干した。

「ご馳走様でした……先生。……ふふっ、私……シスターなのに、こんなに汚れて……。でも、今が一番、幸せかもしれません」

マリーは俺の首に手を回し、甘い吐息を吹きかけながら、幸せそうに微笑んだ。その瞳には、まだ消えない熱が宿っている。

夜はまだ、始まったばかりだ。

俺たちは重なり合ったまま、次の快楽へと向かって、深く、深く沈んでいった。

「先生……。次は、私を……。本当の意味で、あなたのものにしてください……。お願いします……っ」

マリーの熱い懇願が、静まり返った部屋に響き渡った。

第4章.. 聖女の決意と、溢れ出す蜜月



「はあ……はあ……っ。先生……。私の胸、そんなに汚して……。ふふっ、でも……なんだか、すごく……誇らしい気持ちです。私が、先生を受け止めた証拠、ですから……」

シーツの上に横たわり、マリーは大きく波打つ胸を隠そうともせずに、うっとりと俺を見つめていた。

さつき吐き出した白濁が、彼女の白く柔らかな肌の上で真珠のように光り、甘く卑猥な香りを放っている。

清楚なシスターの象徴であるはずの彼女の体が、俺の情欲によって塗り替えられていく光景は、背德的でありながらも、言葉にできないほど美しかった。

「マリー、まだ……大丈夫？」

「はい……っ。もちろんです……。私、先生のためなら……もっど、もっど……汚れだつて、受け入れます。あ、ああっ……んんっ……！」



俺が指先で、彼女の乳首にこびりついた白濁をなぞると、マリーは腰をピクンと跳ねさせた。

敏感になった先端が、俺の指に触れるたびにツンと尖り、彼女の興奮を雄弁に物語る。ヴェールを脱ぎ捨てたマリーの耳が、羞恥と期待で激しく震えていた。

「先生……。私のこれ……。まだ、使ってください。さっきよりも、もっと……。上手に、包み込みますから……。あ、んんっ……」

マリーは自ら、まだ白濁の残る巨大な双丘を寄せ、俺の熱を再びその間に招き入れた。二度目の情事だというのに、彼女の肉の弾力は衰えるどころか、むしろ熱を帯びてさらに柔らかく、吸い付くような質感を増している。

「ん、んう……。っ！ あ、ああっ……。先生の、また……。大きくなって……。っ。私の胸の中で、こんな……。ピクピクっ……。あ、はあ……。んんうっ……。れるっ……」

マリーは空いた手で自分の乳房を揉みしだきながら、俺の先端を舌で転がした。

ヌルリとした粘膜の感触と、豊満な肉の圧迫感。
その両方から攻め立てられ、俺の腰は勝手に動き出してしまふ。

「あ、あはっ……!! いいですよ、先生……。もっと、激しく……。っ。私の胸、壊しちゃうくらい……。っ! あ、ああっ、あわわっ! そこ……。っ、そんなに強く擦られたら……。っ、私……。っ、ん、んあああっ!」

マリリーの喘ぎ声が、より一層熱を帯びる。

俺が彼女の豊かな肉に腰を叩きつけるたびに、バチユン、バチユンと卑猥な音が部屋に響き渡った。

彼女の聖域であるはずの胸が、俺の欲望を受け止めるための器へと変貌していく。

「あ、ああ……。っ! 先生、先生……。っ! 出ちやう……。っ、また、出ちやいます……。っ!
あ、ん、んうーっ!」

我慢できずに、俺は再び彼女の胸の間に熱い塊をぶちまけた。



ドクンドクンと脈打った際に、マリイの顔や首筋にまで、白濁した液体が飛び散っていく。彼女は目を細め、その熱い洗礼を全身で浴びていた。

「はあ……はあ……。先生……。いっぱい、かけてくれましたね……。ふふっ、私……もう、真っ白です……」

マリイは恍惚とした表情で、自分の頬を伝う白濁を指で拭い、それをゆっくりと舐めとった。

その仕草は、どこまでも慈愛に満ちていながら、同時にこの世の何よりも淫らだった。

「……でも、先生。私……胸だけじゃ、もう……足りないんです。私を……一人の女性として、最後まで……導いてください。お願い、です……っ」

マリイは震える手で、俺の首筋を抱き寄せた。

彼女の足が、俺の腰に絡みつく。

熱く濡れた彼女の秘部が、俺の腿に触れ、そこから溢れ出す蜜がヌルりと肌を滑り落ちた。

「……わかったよ、マリィ。俺も、もう我慢できない」

「っ……!! あ、ありがとうございます……。先生の……先生の本当の熱さを……。私の中に……。あ、ああっ、あわわっ! 先生……。っ、それ、すご……。っ、あああああっ!」

慎重に、けれど力強く、俺は彼女の聖域へと足を踏み入れた。

マリィの体は、驚くほど熱く、そして狭かった。

初めての衝撃に、彼女の背中が弓なりに反り、ケモ耳がピンと直立する。

「あ、ああ……。っ! 先生……。っ、先生……。っ! あ、ふうっ……。ん、んう……。……。痛い、はずなのに……。なんだか、すごく……。満たされていくのが、わかります……。先生が……。私の中に、いる……。っ」

マリィは苦悶と快楽が入り混じった表情を浮かべながらも、必死に俺を受け入れようと腰を浮かせる。

俺がゆっくりと腰を動かし始めると、彼女の体内からは、ドロドロに溶けた蜜が溢れ出し、

結合部をさらに滑らかにしていた。

「はあ、はあっ……！ あん、んんっ……！ あ、あはっ……！ 先生、それ……っ、そこ……っ、すごく……いいです……っ！ あ、ああっ……んうっ……！」

シスターとしての規律も、未熟な自分への不安も、今の彼女には関係なかった。

ただ、愛する男に抱かれ、その熱に溶かされる一人の女性としての歓喜だけが、彼女を突き動かしている。

俺が突くたびに、彼女の巨大な胸が激しく揺れ、その重みが俺の胸板に心地よい衝撃を与える。

「先生……！ もっと……もっと、奥まで……っ！ 私の……私の全部、かき回してください……っ！ 私、先生の色に……染まりたいんです……っ！ あ、ああっ、あわわっ！ すごい……っ、頭の中、真っ白になっちゃう……っ！」

マリーの言葉は、次第に理性を失い、本能のままの叫びへと変わっていく。

彼女の締め付けは、俺を逃さないと言わんばかりに強まり、絶頂の予感に体が震え出す。

「マリー、出る……っ！ 出すよ……っ！」

「はい……っ、先生……っ！ 全部、全部出してください……っ！ 先生の……先生の命、私の中に、焼き付けて……っ！ あ、ああっ、あわわっ！ ん、んんんう……っ！」

俺は彼女の最奥へと、今日一番の熱量を叩き込んだ。

同時に、マリーもまた、かつてないほどの大きな波に飲み込まれ、体を激しく硬直させた。

「あ、ああああああああっ……！！！」

長い、長い絶頂。

マリーは俺の肩に深く爪を立て、溢れ出る涙を流しながら、俺の名前を何度も、何度も呼ぼうとして……その言葉を、熱い吐息へと変えた。

しばらくして、俺たちは繋がったまま、荒い息を整えていた。



マリリーの瞳は焦点が定まらず、ただ、幸せそうな笑みを浮かべていた。

「はあ……、はあ……。先生……。私……。今、本当に……。あなたの……。ものに……。なれた気がします……。心から……。心から祈ります。この幸せが……。永遠に、続きますように……。」

マリリーは俺の頬を優しく撫で、その指先についた俺の熱を、愛おしそうに見つめた。そして、彼女は最後に、震える声でこう言った。

「先生……。最後は……。私の、顔にかけて……。ただけですか？ 先生に……。汚されること、それが……。私にとっての、一番の救いなんです……。」

俺は彼女の言葉に従い、最後の一絞りを、彼女の美しい顔へと捧げた。

聖女のような微笑みを浮かべたマリリーの顔が、俺の欲望で白く、ドロドロに汚されていく。彼女はそれを、最高の祝福であるかのように、目を閉じて受け止めていた。

「……。ふふつ。ありがとうございます、先生。……。私、世界で一番、幸せなシスターです」

湯上がりの夜風が、開いた窓から微かに吹き込み、二人の熱を優しく冷ましていった。けれど、マリーの瞳に宿る愛の炎は、決して消えることはなかった。

第〇章…聖域の奥底、重なり合う魂の共鳴

部屋の中に満ちているのは、さっきまでの激しい情事の名残……甘く、少しだけ焦れたような、濃密な空気。

窓の外では夜風が木々を揺らしているけれど、この部屋だけは熱帯のように熱い。

俺の腕の中で、マリーはまだ荒い息を吐きながら、俺の胸板にその豊かな双丘を押し付けていた。

白濁した液体が彼女の肌の上で乾き始め、どこか神聖ですらある彼女の肢体を、いっそ背徳的なまでの色香で塗り潰している。



「はあ……つ、はあ……。先生……。私、なんだか……夢を見ているみたいです。こんなに、体が熱くて……頭の中が、ふわふわして……。あ、ああつ、あわわっ！先生の指が触れるだけで、また……つ、変な声が出てしまいます……つ」

俺が彼女の腰を優しく撫でると、マリーは身悶えしながら、俺の首筋に顔を埋めた。ヴェールの外れた彼女の耳が、俺の吐息を感じてびよこびよここと、いつそ健気に震えている。

その仕草があまりに愛おしくて、俺の熱は再び、自己主張を始めていた。

「マリー……。まだ、足りないみたいだ」

「あ……。せ、先生……。ふふつ、嬉しい……。私も、同じです。先生に、もっと……もつとめちやくちやにされたいなんて……シスターとして、はしたないでしょうか。でも、抑えられないんです。心から祈ります……。今この瞬間が、もつと深く、私を焼き尽くしてくれませうに……」

マリーは自ら、その重たい胸を持ち上げ、俺の熱へと押し当てた。

二度目の情事は、言葉なんて必要なかった。

彼女の潤んだ瞳が、何よりも雄弁に俺を求めている。

俺は彼女を押し倒し、再びその柔らかな聖域へと分け入った。

「ん、んんうーっ！ あ、ああつ……先生っ、先生……っ！ あ、はあ……っ、さつきよりも……ずっと、太くて……熱いです……っ。あ、ん、んああああつ！」

二人の結合部から、ヌチュ、グチヨ……という卑猥な水音が、静かな部屋に響き渡る。

マリーの体は、俺の熱を迎え入れるために、さらに多くの蜜を溢れさせていた。

彼女の大きな胸が、俺の動きに合わせて激しく、ゆっさゆっさと揺れる。

その重量感のある肉の弾力が、俺の胸に絶えず押し寄せ、快樂を何倍にも膨らませていく。

「はあ、はあつ……！ あ、あはつ……！ そこ、そこです……っ！ 先生が、私の……私
の一番弱いところ、ずっと、叩いて……っ！ あ、ああつ、あわわっ！ おかしくなっちゃ
う……っ、私、壊れちゃいます……っ！」

マリィは俺の肩に深く爪を立て、のけ反るようにして快樂を食った。

清楚な彼女が、今はただ、俺に抱かれる悦びに身を任せている。

そのギャップが、俺の独占欲を激しく刺激した。

俺は彼女の足をさらに高く持ち上げ、最奥を抉るように激しく腰を動かした。

「あ、あああああつ……！　せ、先生……っ、それ、すご……っ！　あ、ふうっ……、ん、んう……っ！　もつと……もつと、突き上げてください……っ！　私の全部、先生の熱で……満たして……っ！」

マリィの吐息が、甘い熱となって耳元をかすめる。

彼女の締め付けは、俺を飲み込もうとするかのように強まり、逃げ場のない快樂が脳を白く染め上げていく。

彼女のケモ耳が、絶頂の予感に激しく痙攣していた。

「マリィ……！　一緒に、いこう……っ！」

「はい……っ、はいっ、先生……っ！　私を……私を、先生の種で……いっぱいにして……っ！」

ふっ、すごく……すごく気持ちいいです。私、今、本当の意味で……先生と、一つになれたんですね……」

マリーは俺の頬を優しく撫で、潤んだ瞳で俺を見つめた。

その表情には、すべてを捧げきった聖女の慈愛と、愛する男に満たされた一人の女性の充足感が混ざり合っていた。

「……先生。私、こんなに気持ちよくなれるなんて、思ってもみませんでした。先生に抱かれている間、私……自分がどこにいるのか、分からなくなるくらい……幸せで。あ、ああっ、あわわっ……。思い出すだけで、また……体が熱くなってしまいます……」

彼女は照れくさそうに笑いながら、俺の胸に顔を寄せた。

俺もまた、彼女の柔らかな髪を撫で、その心地よい疲労感に身を任せた。

「俺もだよ、マリー。マリーがこんなに……可愛くて、色っぽいなんで。……本当に、最高だった」



「あ……。ありがとうございます、先生。……私、まだ未熟ですけど。でも、先生を幸せにすることなら……。誰よりも、頑張れる気がします。ふふっ、立派なシスターへの道は、まだ遠いかもかもしれませんが……。先生の奥さんへの道なら、もう、一步踏み出せているでしょうか？」

マリリーの冗談めかした、けれど本気の色を帯びた言葉に、俺は彼女をより強く抱き寄せた。夜が明けるまで、まだ時間はたっぷりある。

俺たちは重なり合ったまま、お互いの体温と、愛の余韻をいつまでも確かめ合っていた。

「先生……。大好きです。心から……。心から、愛しています」

マリリーの甘い囁きが、静かな部屋に溶けていく。

キヴォトスの喧騒も、聖職者としての重圧も、今の二人には遠い世界の出来事のようにだった。

ただ、重なり合う肌の熱さと、心からの祈り。それが、この夜のすべてだった。



終章…放課後の密やかな祈りと、消えない熱情

あの夢のような温泉旅行から数日。キヴォトスの日常は、何事もなかったかのように過ぎていく。

けれど、俺とマリーの間にある空気だけは、確実にあの日之境に変わっていた。放課後のシャーレの執務室。日が沈み、オレンジ色の残光が窓から差し込む中、マリーが淹れてくれた紅茶の香りが部屋に満ちている。

「ふふっ。先生、お疲れ様です。……お仕事、少し一段落しましたか？」

デスクの隣で、マリーが穏やかな、けれどどこか熱を帯びた笑みを浮かべて俺を見つめている。

いつも通りの清楚な修道服。けれど、その下にある体がどれほど熱く、どれほど淫らに俺

を受け入れてくれたか。

それを知っているのは、世界中で俺だけなのだ。

「ああ、マリーのおかげで助かったよ。……そういえば、シスターフッドの方は大丈夫？
サクラコやヒナタに何か言われたりしなかった？」

「あ……。は、はい。サクラコ様には『少し雰囲気が柔らかくなったわね』と仰っていた
きましたし、ヒナタさんからも『なんだか幸せそうですね』って。……ふっ、そんなに顔
に出てしまっているのでしょうか」

マリーは少し困ったように、けれど幸せそうに自分の頬を押さえた。
ヴェールの下、隠されたケモ耳が俺の視線を感じてぴよこりと動く。
あの日、あの温泉で。俺が何度も、何度も噛みつき、愛でたあの耳。
その記憶が脳裏をよぎり、俺の体は反射的に熱を帯びていく。

「先生……？ そんなにじつと見られると……。あ、ああっ、あわわっ！ なんだか、あの
夜のことを思い出してしまって……。私、また……。っ」

マリリーの吐息が、急に熱くなった。

彼女は周囲を気にするように入り口の鍵が閉まっていることを確認すると、おずおずと、けれど確かな足取りで俺の元へと歩み寄ってきた。

俺の膝の上に、彼女の柔らかな重み加わる。

修道服越してもはつきりと伝わる、あの巨大な双丘の感触。

「……先生。私、あの日からずっと……先生のことばかり考えてしまってます。シスターとして、祈りを捧げている時でさえ……先生に抱きしめられた感覚が、消えなくて……」

マリリーは俺の首筋に手を回し、甘い吐息を吹きかけた。

彼女の目は、すでに情欲の泥濘に沈みかけている。

俺は彼女の腰を引き寄せ、その唇を奪った。

深く、激しく。唾液が混ざり合い、銀色の糸が引く。

「ん、んんう……っ！ はあ、はあっ……先生……っ！ あ、あはっ……。やっぱり、我

慢……できません。私を……また、ぐちゃぐちゃに……汚してください……っ」

マリーは震える手で、俺のベルトを解き始めた。

執務室のデスクの上、本来なら神聖な仕事の場が、一瞬にして二人の密やかな聖域へと変わる。

彼女は慣れた手つきで俺の熱を解放すると、その場に膝をつき、上目遣いで俺を見つめた。

「あ……。また、こんなに……。っ。ふふっ、私のこと……。待っていてくれたんですね。……じゅるっ、れるっ……。んむ、んっ……」

マリーの小さな口が、俺の熱を根元まで迎え入れる。

温泉の時よりもさらに大胆に、彼女は舌を使い、喉を鳴らして俺を奉仕していく。

ヌルリとした口腔内の熱、そして時折触れる牙の刺激。

清楚なシスターが、一心不乱に俺のイチモツをしやぶる光景。その背徳感だけで、俺の理性が焼き切られそうになる。



「ん、んんうーっ！ ぶはっ……はあ、はあ……っ。先生、すごい……。ドクンドクンって、私の口の中で……暴れて……。……次は、これを使いますね」

マリーは修道服の前をはだけ、中からあふれんばかりの……。いや、実際にブラジャーを押し退けてこぼれ落ちた、巨大な乳房を露出させた。

温泉で見た時よりも、さらに白く、瑞々しく輝いているように見える。彼女はその重たい肉で俺の熱を挟み込み、掌でグッと押し潰した。

「あ、あああああっ……。先生、先生……。っ！ 見てください……。私の胸、先生のと……。こんなに押し広げられて……。あ、ああっ、あわわっ！ ヌルヌルして……。すごく、気持ちいいです……。っ！」

バチュン、バチュンと、肉と肉がぶつかり合う卑猥な音が部屋に響く。

マリーは恍惚とした表情で腰を振り、俺の熱を自分の肉の深淵へと沈めていく。

巨大な乳房が激しく波打ち、彼女の汗と愛液が混ざり合って、俺の肌を汚していく。



「あ、あはっ……!! 先生、いく……っ、いっっちゃう……っ!! 私の胸に……全部、出して
ください……っ! あ、ん、んああああっ!!」

限界を迎えた俺が、彼女の胸の間に白濁をぶちまける。

ドクドクと脈打つたびに、マリーの顔や胸元が白く染まっていく。

彼女はそれを最高の勲章であるかのように、うっとり見つめ、指で掏って口へと運んだ。

「はあ……はあ……。美味しい……。先生の味……。ふふっ、でも……。まだ、終わりじゃあ
りませんよね?」

マリーは立ち上がり、デスクの上に横たわった。

修道服をまくり上げ、露わになった彼女の秘部は、すでに俺を受け入れる準備を終えて、蜜
でドロドロに濡れ光っていた。

俺は迷わず、彼女の最奥へと自分を叩き込んだ。

「あ、ああああああああっ……!! 先生……っ、先生……!! あふっ……、ん、

んんっ……！！ あ、あはっ……！！ そこ……っ、そこ、すごく……いい……っ！ 私の……私の奥、壊れちゃう……っ！」

マリリーの体が弓なりに反り、ケモ耳がピンと直立する。

俺が突くたびに、彼女の巨大な胸が揺れ、彼女の口からは言葉にならない、甘い悲鳴が漏れ出す。

デスクがガタガタと音を立て、二人の結合部からは、グチヨグチヨと、およそ神聖な場には似つかわしくない音が響き渡る。

「はあ、はあっ……！！ 先生……！！ もっど……もっど、激しく……っ！ シスターの私じゃなくて……先生の女としての私を……っ、もっど、愛してください……っ！ あ、ああっ、あわわっ！ くる……っ、また、きちゃう……っ！」

マリリーの締め付けが、狂おしいほどに強まる。

俺もまた、彼女の情熱に応えるように、腰の動きを加速させた。

絶頂の予感に、二人の体温は限界を超え、思考は真っ白に塗り潰されていく。

「マリー、出すぞ……っ！ 中、いっぱいにする……っ！」

「はい……っ、先生……っ！ 全部……全部、私の中に……っ！ 先生の種、一滴も残さず……飲み干してあげます……っ！ あ、ああっ、あわわっ！ ん、んんんう……っ！」

俺は彼女の最深部へと、熱い奔流をぶち込んだ。

ドクンドクンと、彼女の胎内を直接叩く感覚。

マリーも同時に、かつてないほどの大きな波に飲み込まれ、体を激しく震わせながら絶頂に達した。

「あ、あああああああああ……っ……っ……！」

長い、長い絶頂。

二人は重なり合ったまま、荒い息を整えていた。

静まり返った執務室に、愛の余韻だけが漂っている。

マリーは俺の肩に顔を埋め、幸せそうに涙を流していた。



「はあ……、はあ……。先生……。すごかった、です……。私、今……世界で一番、満たされていきます……」

マリイは俺の頬を撫で、愛おしそうに俺を見つめた。

その瞳には、あの日温泉で誓った愛よりも、さらに深く、揺るぎない情熱が宿っていた。

「……先生。本当に……。本当に気持ちよかったです。先生に抱かれている時、私……。自分がどこにいるのかも、自分が誰なのかも、全部忘れて……。ただ、先生のこと、大好きだったので……。それだけが、溢れてきて……」

彼女は照れくさそうに笑いながら、俺の唇にそつとキスをした。

「……私もだよ、マリイ。マリイの全部……。本当に最高だった。これからも、ずっと……。こうして、そばにいてほしい」

「はい……。もちろんです、先生……。ふふっ。さて、少し汚れてしまいましたね。サクラ

コ様に見つかる前に、お片付けしましょうか。……あ、でも……もう少しだけ、こうしていても……いいですか？」

マリーは俺の胸に寄り添い、幸せそうな寝息を立て始めた。

キヴォトスの夜は更けていく。

けれど、二人の間に灯ったこの消えない熱情は、これからもずっと、この街のどこかで密やかに、けれど激しく燃え続けていくのだろう。

「心から祈ります……。この幸せな時間が……。いつまでも、続きますように……」

聖女の祈りは、静かな夜の闇に溶け込み、二人の絆をより深く、より強く結びつけていった。

く完く

